

特別講演

死を通して生を考える教育

—現在の社会に最も必要とされているもの—

中村博志 (東京純心女子大学)

最近の子どもたちの引き起こす残虐非道な事件の多発をみて、ある種の恐怖感を感じてしまうのは筆者だけではあるまい。筆者はこのような事件の背景に「子どもたちの周りから死が遠ざかった」ことが1つの要因でないかという仮説を持つようになった。少子・高齢化の中で、子どもたちが肉親の方々の死など、極めて情緒的な想いをする機会を奪われているのではないかという仮説である。

実は、1998年の金子ら¹⁾の報告で、小6の生徒に「人は死ぬとどうなると思いますか」という設問の答えとして、「死んでも生き返る」、ないし、「死んでも生き返ることがある」との答えに丸をつけた生徒がなんと計50%程度いるという報告を見て、筆者も小中学校で同様な調査を実施してみたところ、1/3ないし1/2の子どもたちに上記と同様な結果が得られたため(表1)、もしこれが本当であればかなり問題であるという認識からこのテーマへの関心が

深まったのである。その後、約2,000例への調査を実施したが²⁾、やはり、この両者を合わせて20%以上の成績が得られた。さらに、その後も少数例ではあるが調べてみると、いずれの調査も20%を超える成績であった(表1)。また、その後の各種調査においても、ほぼ同様な成績が得られている³⁾(長崎県教育委員会報告: 15.4%)。少なくとも死の認識に関してのこれまでの研究では、いずれの文献でも、およそ、9歳ないし10歳になるころになると、大人とほぼ同様なレベルにまで到達するといわれてきた⁴⁾。しかし、筆者の調査などでもこれを大幅に上回っているのである。

しかも、この設問①、②と答えたものに、その理由を聞いてみたところ、①見たことがある、②教えてもらったの両項目のいずれれもがそれぞれ10%を超えていた(表2)。しかも、同時に聞いた「誰でも死ぬことが怖いと思っているだろう」という設問では、「はい」に丸をつけ

表1 問 人は死ぬとどうなると思いますか

	金子ら	中村	中村	中村	中村	都内某中学校
調査年度	1995	2000	2002	2003	2006	2006
対象	小6	小4~6	中学生	小・中・高校	小6	中学1~3年
例数	298	372	441	1,887	54	149
① 生き返る	23.8%	33.9%	49.3%	9.2%	11.1	8.5%
② 生き返ることもある	25.9%			12.7%	13.0	16.9%
③ 生き返らない	31.6%	33.9%	33.3%	32.9%	46.3	35.2%
④ わからない		31.5%	17.4%	30.9%	16.7	24.6%
⑤ その他				14.3%	13.0	14.8%

連絡先: nakamurh@sage.ocn.ne.jp

Tel: 03-3484-6929

表2 あなたはどうしてそう思いますか？

	子ども未来財団		中学生		茨城某小6年		都内某中学	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
① 見たことがあるから	138	13.2%	59	17.2%	3	7.7%	22	25.0%
② 教えてもらったから	128	12.3%	58	16.9%	11	28.2%	16	18.2%
③ なんとなく	588	56.4%	227	66.0%	19	48.7%	36	40.9%
④ その他	188	18.0%			6	15.4%	14	15.9%
合 計	1,042	99.9%	344	100.0%	39	100.0%	88	100.0%

表3 誰でも死ぬことがこわいと思っているだろう

	子ども未来財団		茨城某小6年		都内某中学校	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
はい	797	48.1%	32	60.4%	85	61.6%
?	286	17.3%	4	7.5%	26	18.8%
いいえ	573	34.6%	17	32.1%	27	19.6%
合 計	1,656	100.0%	53	100.0%	138	100.0%

たものは、半数もいないのである(表3)。

このような調査を行っているうちに、大学生においても死んでも生き返ると思っていた学生に出会ったし、さらに、歯学部学生においてもおよそ5年間での延べ500人の学生中5名の学生にこのような学生が存在することに気付かされた(<http://www.death-education.com>: 詳細はこのWebをご覧ください)。これらの学生は全員テレビを見てそのように思ったと書いていたのである。

筆者の講義を聞いたある母親が、わが家に帰った後、「死者蘇生、死者蘇生」と言っていた小学1年生の男の子の姿に愕然として、彼女の自宅でのDeath Educationが始まったのである。この間の経過を6回の手紙で筆者に語ってくれたのが「デス・エデュケーションの実践例～家庭での取り組み～」(http://www.death-education.com/kyouiku_21.htm)である。これをご覧いただければ、このような取り組みで子どもがいかに大きく変化するかということに気付くことができよう。

これらの結果をどのように解釈するかが大きな問題点であろう。勿論、この結果を輪廻転生であると解釈をされる方もおられるが、筆者はそれにしても頻度が多すぎると思えるのであ

る。筆者はこの成績を死から遠ざかった環境のため、死をほとんど考えずにきたもの、あるいは、社会環境の変化にともない(例えば、子どもたちを誤った死の認識に導く多くのテレビ報道など)、死を誤って捉えている子どもの増加として捉えたい。これらの結果は単に簡単なアンケート結果であるので、まだまだ、そこまで考えるのは行き過ぎであるという意見があるのは十分に承知している。しかし、この結果がもし、何年か後に仮に正しいと証明されたとしたら、その時にはすでに手遅れである可能性が高いことを憂慮している。また、これには、いわゆるバーチャルとノンバーチャルとの違いが曖昧になっている現代の子どもたちの姿が垣間見える。

筆者はこれらの成績から、「子どもたちの周りから死が遠ざかった結果として、死について考える機会が減少し、死についての正しい認識が得られていないのではないか」という仮説を持つに至った。

言うまでもなく、これまでの社会は死の認識は親から子へ、子から孫へと伝えられてきたと思われるが、家庭崩壊などの影響もあり、このようないわば「文化の伝承」としての死に関する基本的知識すら自然のうちに伝わるものとならず、今後何らかの手を打たないと伝わっていかない時代に入ったと認識する必要があると思えるのである。例えば、自分の祖父なり祖母なりが亡くなった折に、その棺の中のご遺体に縋って泣いている母親の姿は大学生になってもいつまでもその姿が心に残っていると感想文に書いてくれる学生はかなり多いし、ご遺体の手に触った時のその手の冷たさは今でも感触と

して残っていると書いてくれる学生も少くない。このように実体験を通じての感覚が非常に重要なのである。

死に出会う機会が減少した現代では、われわれが提唱するように「死を通して生を考える教育」を大人サイドがかなり積極的・意図的に子どもたちに提供する機会を与えていかなければならない時代になっているという認識を持たねばならないのである。しかし、事柄が事柄であるゆえに、慎重に取り扱うのは当然である。だが、この慎重ということも、取り組むことに慎重であってはずらず、取り組むことには積極的であって欲しい。だが、その取り組む場合の方法論等は慎重であることが重要である。

このテーマへの方法論に関しては、筆者は比較的グローブに考えている。これを実施する方々が、それまでの自分の人生を振り返って、自分なりの方法論で行えばいいのではないか？

要するに、死を考える機会が少なくなった現代であるから、できるだけ「死を共に考える」機会を大人側が提供することが必要なのである。ここで重要なのは、「共に考える」ということである。Death Education というと、教育という言葉から「教える」というイメージをもたれるかもしれないが、このテーマにおいては、教える部分は多々あるとしても、それ以上に、「一緒に考える」ということが重要であることを強調したい。

大学生が大部分ではあるが、これまで小・中学生を含めて約5,000人以上の生徒・学生さんたちに筆者の考える「死を通して生を考える教育」の重要性を訴えてきたが、その講義後の感想文を読んでもみると、かなり多くの生徒・学生さんがこのテーマの重要性を強く感じ、「自分の生き甲斐」を見直していただけたことが判明している。

それではこの講義を行った結果、その成果として何が起るのか？

多くの感想文を読んだ結果、次の2つの成果が得られると感じている。

1つは死を提示することによりまず、何かを考えてくれる。その後、自分を見つめ、その結果として自分の生き甲斐を感じるという思考過程を経るようである。さらに興味深いのは、2

つ目としてこの結果、どうもこの世の中は自分1人で生きていないと感じるらしく、周りの人との関係性に気付くらしい。

最近の子どもたちが生き甲斐を持ち難く、しかも、自己中心的であるということがよく言われるが、この2つの課題を同時に解決する手段として、われわれの提唱する「死を通して生を考える教育」が役立つ可能性があると思えるのである。

ところで、このテーマに取り組む場合に前提として考えておくべき事項がいくつかある。

まず、一般にこのテーマが難しいと考える方は多いが、決してそうではないのである。

その答えとして、1つの事例を挙げることにする。この事例は、筆者の講演を聞いてくれたある母親からのメールである。

この母親は筆者の講演を聞いて帰る途中に、晩の味噌汁の実にアサリを買って帰った。そのアサリを鍋に入れておいたところ、その家の幼女がアサリの触覚に触って遊んでいたという。その夜、アサリの味噌汁を食べた時に、母親は次のように言ったのだという。「あなたはこのアサリを食べて生きているのですよ」と。これは、立派な Death Education といえると思う。このように、われわれの周りにはこのテーマの教材はいくらでも転がっているのである。残念ながら、死のタブー化も手伝って、このような取り組みを積極的に行おうとする流れはこれまでなされなかった。また、われわれは食事の前に、「いただきます」というが、これも仏教では「生き物の命をいただく」という意味であるという。このようなことを子どもに伝えるのは、誰でも、いつでも容易にできるはずである。

であるからして、このテーマの重要性にまず気づき、これを行うことが現代の世の中において喫緊な課題であると認識することが必要である。

このテーマを考えるときに、重要な課題は「人称性の問題」である。ここでいう人称性とは、一人称は自分の死、二人称は貴方の死ではなくして自分の身内の親しい人の死であり、三人称は他人の死である。ここで重要なのは、二人称の死である。本当に悲しい死は二人称の死であり、これを通じて、子どもたちは死を認識する

と思われる。この経験が大切なのである。しかし、残念ながら、この経験をする機会が極めて少ないのが現代の社会なのである。この点をまず認識して、このような機会を、大人たちが積極的に子どもたちに与えていくことが必要なのである。二人称の死が減少した現代の社会においては、人間の死からこれを学習する機会は大大幅に減少している。したがって、この代りとしてのペットなど動物の死は極めて重要な「きっかけ」となろう。筆者は現代の社会では、二人称の死が減少し、これに反して三人称の死が圧倒的に多いこの現代の倒錯現象が少なからず子どもたちに何らかの影響を与えているのではないかと考えている。

もう1つ、子どもたちにこの話をする時、必ず話すことがある。それは生と死は一体であり、分離することができないということである。生きるということと、死ぬということはいわば同じものであるということ、このような取り組みをするうちに強く感じるようになった。当たり前前といえば当たり前前ではあるが、このことを子どもたちに必ず伝え、考えてもらうようにしている。

大学での講義の折にも、学生さんたちに「貴方たちが将来結婚をして子どもができた時、絶対に言ってほしくないことがある。それは、カブトムシを買ってきて、そのカブトムシが死んでしまった時に、明日デパートへ行って買ってきてあげる」と。

もう1つ重要なことは、対象とする子どもたちの年齢により、その手法はかなり異なってくることである。

年齢が小さいほど、具体的な話題を中心としての話になる。例えば、飼っているペットが死んだ時に、遺体を庭に穴を掘ってそこに葬りながらの会話が大切である。例えば、「〇〇ちゃん、とても貴方と仲良しだったね。」とか、「毎日、貴方が散歩に連れて行ってあげたね。」とかいう話である。しかし、いくらこのようなテーマが重要であるとはいえ、毎日このようなことを考えていたら、暗くなってしまうことは否めない。であるから、少ない機会をできるだけ有効に利用することが大切なのである。例えば、自分の飼っていたペットが死んだときとかであ

る。このような機会が少なくなった今日では、常日頃からこの時に話す話の準備をしておく必要性がある。これを筆者は「引きだし」と呼んでいるが、常に引き出しの準備をしておくことが重要なのである。

これを行う場の問題であるが、勿論、家庭で行うことが最も良いのは言うまでもなからう。しかし、残念ながらこのようなことが行われにくいほど、家庭崩壊が進んでいるというのがわが国における現状であろう。

これに次ぐ場として考えられるのが学校である。しかし、学校で実施する場合にはあくまで、補完的立場で行うことが望ましい。筆者自身は最初すべての学校教員にこのような取り組みを行ってほしいと願っていたが、現在では全く反対の立場をとっている。あまり多くの教員が取り組むとなると、作業がマニュアル化し、本来伝えたいものが逆に伝えられない事態になることを心配するからである。

さらに、強調したいことは、本学会員のような医療関係者の立場である。特に小児科医は、最も子どもたちに近い立場で仕事をしているし、また、同時に坊さんと同じく、最も死に近い立場でもあろう。このような立場である小児科医が、「死を通して生を考える教育」を行うために極めて重要な位置にいることをもっと認識してほしいのである。

また、筆者はこのテーマでの講義を行う場合に、「生物学的視点の重要性」についても話す。これは、宗教的基盤の少ないわが国での現状を考えた時、「生き死に」について考える1つの要素となりうると思うからである。生物学的視点とは遺伝子情報での話である。特に、アポトーシスとか、テロメアとかについて話をする。筆者自身はこのテーマでの切り口はいかなる方法でもありうると考えているが、自分自身が特定の宗教に関心を持っていない関係上、このような立場で行っているのである。

現在までのところ、このテーマに取り組む場合の教材は、このテーマを実施している教員側がそれぞれ工夫をして実施しているというのが現状であろう。筆者自身はこれを解消するために、2本のビデオを自主制作した。1つは筋ジスの患者さんに自分の死生観を語ってもらった

ものであり、もう1本はALSの患者さんの生き甲斐を追ったものである。これまで、かなりの学生さんたちに見ていただいたうえでの感想文を書いてもらっているが、いずれも十分に使用に耐えうるものであると確信しているし、多くの方々にぜひお使いいただきたいと願っている。

最後に、今後このテーマが広く多くの方にご支持・ご共感をいただくことにより、わが国の将来を担う子どもたちができるだけ健やかに育っていってくれることを心から願っている。

本論分の大要はすでに、拙書^{5,6)}にも、上述のWebにも載せてあるのでぜひご覧いただきたい。

最後に、このような貴重な特別講演の機会をお与えいただいた第54回日本小児保健学会森川昭廣会頭ならびに座長の労をとられた高野陽先生に心より御礼申し上げたい。

文 献

- 1) 金子政雄他：「命」に関する小学生の意識調査、生物教育 1995；35（2）。
- 2) 中村博志他：児童の健全育成における青少年の生きる意識についての調査研究、平成15年度児童環境づくり等総合調査研究事業報告書、こども未来財団研究報告書、2003。
- 3) 長崎県教育委員会資料、児童生徒の「生と死」のイメージに関する意識調査について、2004。
- 4) 中村博志：死の認識・生の認識の発達 金子書房、2006。
- 5) 中村博志：死を通して生を考える教育～子供たちの健やかな未来をめざして～、川島書店、2003。
- 6) 中村博志：死を通して生を考える～すこやかな子を育てたいお母さんへ～、リヨン社、2006。